戦災から逃れて もうひとつの世田谷

角山・世田谷部落 70 周年

冬の交通の足は馬そりでした。
（昭和 35 年）堀江孝司さん提供

昭和 19 年、20 年の大空襲により東京は焼野原。戦禍が広がる中、戦災者の疎開と食糧難対策が急務となり東京都や北海道庁などは疎開と食糧増産を目的に北海道開拓集団帰農者を募り、北海道各地に疎開（移住）させました。集団帰農者を「拓北農兵隊」と呼びました。

江別市角山地区の通称「世田谷部落」。東京都世田谷区の住民が戦災を逃れ、入植したところです。戦後 70 年。世田谷入植二世も齢 80 を超えました。世田谷部落（北海道では集落のことを部落という）のあゆみから振り返ります。

拓北農兵隊

空襲などの戦災にあった都市の被災者救援のため、政府は昭和20年5月「北海道疎開者戦力化実施要綱」を策定し、5万戸、20万人の集団移住計画を決定、新聞などを通じて移住者を募りました。北海道の集団帰農では、酪農学園の創始者黒沢西蔵（とりぞう）氏の働きかけが具体化したものでした。

北海道庁内に「北海道集団帰農者受入本部」が設けられ、世田谷区民を含む第1陣が出発したのが昭和20年7月6日。この集団帰農者が「拓北農兵隊」と呼ばれました。

東京からの第1陣約200世帯は8つの隊に分かれ、当時の江別町のほか、杉並区は手稲村、足立区は琴似町、目黒区などは豊平町、板橋区は札幌村、大森区は白石村、品川区などは角田村（現・栗山町）などそれぞれの地に入植しました。しかし、江別町や角田村などの一部を除き、ほとんどが厳しい自然環境に打ち勝てず、入植地を離れていきました。

疎開者などは昭和20年10月までに東京、大阪など18都府県から3419戸が全道各地に入植しました。この内、東京からの疎開者などが50％を占めていました。

原野は泥炭地

拓北農兵隊に応募した世田谷区民の職業は、教師、画家、俳優、鉄工業、菓子職人など農業とは無縁の人たちでした。

昭和20年7月6日午後4時25分、東京上野駅を臨時列車は、北を目指し出発しました。出発式には当時警視総監だった町村金吾氏（後の北海道知事）が見送りに来ていました。列車が野幌駅に到着したのは7月9日の早朝でした。野幌駅に着いた一団は、駅前の天徳寺での受入式で受け入れ農家と顔合わせをし、それぞれの農家に散りました。受け入れ先は機農部落14戸、西角山部落4戸、対雁部落8戸（計26戸）で、しばらくは分宿の日々でした。

当時入植した世田谷の人々を待ち構えていたのは、寒く厳しい未墾の地。入植地は泥炭地が広がる原野。割り当ての土地に通い、住宅作りが初めの仕事となりました。材料は原始林から切り出して運び、屋根と壁は周辺にあった茅（かや）や葦（あし）を刈り取り材料にしました。とりあえず雨露をしのぐ体裁のものでした。それでも年内に入居したのは10世帯

振り返る

中澤 和子さん（85 歳）

父は和菓子職人だった。15歳で来た。現在の住まいは二度目の場所で、移転時の住宅は叔父さんの設計で建てた。古い家は雪で軒が一部破損しているが、木造平屋で煉瓦煙突がまだ残っている。当時は水、電気がなく難儀した。飲み水は泥炭の茶色い水だった。今では息子夫婦らが牛の世話などを頑張ってくれている。振り返るとあっという間の感じ。8月4日、ＪＲ京浜東北線の架線断線事故で桜木町駅と蒲田駅間が不通とのニュースを見て、江別に来るまで住んでいた蒲田を懐かしく見た。

中村 秀哉（ひでや）さん（87 歳）

世田谷羽根木町（現・代田）にいた。農業には興味があった。昭和 36・37 年水害では厚別川堤防に牛を避難させ、乳搾りを堤防の上でやった。冬の厳しさは今と比較できない。住いは三角小屋で大雪で屋根が押しつぶされそうになったこともある。日々、畑仕事に明け暮れている時、堀江さん、田辺さんら同じ若い仲間と文学、音楽、俳句などの話題で話が膨らみ、皆で原稿を持ちより青年会誌「新雪」をガリ版刷りで作成した。振り返ると当時の暮らしが垣間見える。

田辺 昭雄（てるお）さん（88 歳）

世田谷上馬に住み、国鉄で電気技師をしていた。おやじ達は一足早く、角山に来ていた。昭和 20 年 10 月、長期の休みをとって角山に様子を見に来た。家づくりと越冬準備の真っ最中だった。これは親一代の問題でない、おれも農業をやろうと国鉄を辞め、昭和 21 年正月に来た。世田谷二世になった。来る時に母方の実家（千葉県）からスイカの種を持たされた。種を植え、８月のお盆には立派なスイカができた。後に“世田谷のスイカ”と評判になってよく売れた。

入植当時の仮住宅

でした。また農作業は、原野特有の泥炭地との闘いでした。溝を掘り、水を抜き、客土（土砂の搬入）などの土地改良が地区全体で毎日続きました。厳しい冬の生活などの苦難に耐え、必死に切り開き、やっていける目途がつくまで10年かかりました。

電気が点いた

電気は今、全道くまなく電線が張り巡らされていますが、昭和30年代は未点灯地域がたくさんありました。角山の入植当時の灯りは、カンテラ、石油ランプでした。北海道電力は、入植者が増え、収益率の基準が超えたため、配電線延長に踏み切りました。当時、電力会社では1戸当たり1万900円までは負担しますが、それを超えた分は各戸が負担しました。部落は残金1万5千円と労力を負担することになりました。労力は電柱の運搬と立てること、また、泥炭地で風が強いため、電柱根元に馬そり2台分の土砂を入れるなどの作業でした。

角山地区の通電式のようす。

昭和31年2月から3月にかけ東1号線道路沿いに電柱を立てました。角山の雪原を1本の線のように電柱が立ち並ぶ姿は壮観でした。それまでは吹雪の道しるべに柳の枝を立てていましたが、がっちりとした電柱に変わりました。

3月12日正午、テスト送電が行われ、家の電灯が点きました。電気は世田谷部落だけでなく中央角山、東角山にとって待望したものでした。次の日から夜が待ち遠しかったそうです。手稲山に日が沈みかけた頃、電灯を点けると子どもたちは飛び上がって喜びました。どの家も明るく幸せな気分になりました。

江別の電灯は大正3年1月、江別市街の210戸に始まります。角山地区の電化は42年後の事でした。

江別の世田谷70周年祝賀会

世田谷部落の住民は、野幌駅に江別隊が到着した昭和20年7月9日を「入植記念日」として毎年、お互いの無事を確認し、絆を深めています。今年も7月9日、中澤牧場で子孫ら約60人が出席し祝賀会を開催しました。最初に入植した33世帯は、終戦の報で8月末には東京に戻った世帯もあって24世帯となり、さらに翌春の入植時は18世帯に減っていました。現在残るのは、世田谷入植二世の6世帯です。

世田谷70周年実行委員会会長田辺昭雄さんは「農業に不慣れな者が集まって、先輩たちから学び、懸命に開墾してきた」と話し、また、三好昇市長は「先人が努力され、冷害や水害が多く過酷な中で、開拓された土地。心から敬意と感謝を称し、世田谷の発展を願いたい」と挨拶しました。

○

江別の戦後開拓は、食糧増産の期待を目的に世田谷を含め現在の西野幌、東野幌、美原、豊幌など8つの開拓地に及びます。豊かに広がる田園の奥に、先人たちの労苦の物語があります。先人への感謝とともに、未来に引き継いでいかなければなりません。

（編集＝企画政策部広報広聴課）

入植記念日にさらに絆を深めます。

主な参考文献：世田谷物語　叢書・江別に生きる　太田恒雄著（平成元年、江別市教育委員会）、世田谷開村五十周年（平成7年、世田谷開村五十周年記念実行委員会）、えべつ昭和史（平成7年、江別市）、北海道戦後開拓史（昭和48年、北海道庁）

世田谷二世

山形 トムさん（81歳）

父親は俳優の山形凡平（ぼんぺい）、あまり農作業のできる身体ではなかった。東京を出る時にたんかを切った手前、帰るのは悔しい、ここで頑張ろうとなった。地区の世話役として土地改良などの陳情活動などで働いた。自分はまだ若かった。土地が痩せていたので牛を飼うことになった。初めの牛は無償貸付牛で、牛飼いには休みがなかった。芸人の血が騒ぐのか、地元の劇団「川」で演劇活動に参加したこともあった。また絵を描くのが好きで特に牛の放牧の絵画は話題になった。

横山 民男さん（83歳）

三軒茶屋に住んでいた。角山には13歳の時に来た。親に連れられ東京上野駅から汽車に乗った。青函連絡船の甲板から海を眺めるとイルカが飛んでいた。子どもながらによく覚えている。野幌駅に着いて天徳寺で受け入れ農家と顔を合わせ、機農部落に世話になった。入植地の角山に通い、住いをみんなで作った。柱、梁の部材は原始林から運んだと聞いた。壁と屋根は周囲の茅と葦を使用し、秋頃にようやくできた。冬は寒かったし、寝床にも雪が入ってきた。今では想像できない暮らしだった。

堀江 キヨ子さん（85歳）

世田谷というより満州からの引揚げ後で角山の入植は昭和22年、17歳で来た。東京では住むところもないし食糧事情も悪かった。先に入植した叔父さん一家を頼って江別に来た。農業経験なし、鍬（くわ）を持ったこともない。満州の生活は炭鉱の機械関係で働いていて電気、水など不便はなかった。でも江別では電気も水もない生活で、洗濯物などは、白い肌着も茶色くなっていた。

角山小学校では、昭和23年から4年間、代用教員として働いたこともある。